

ぶつきょうつうしん せいぎ がつ
仏教通信 「正義とは」 5月

「正しく立派な人になりなさい」と私 達は教わってきました。しかし、浄土真宗を開いた親鸞聖 人とその師匠である法然上人は、あえて逆 の言葉を残されました。それは「愚者になりて往 生す（自分をおろかな者と自覚する人こそが、仏 さまの世界へ救われていくのです）」という教えです。なぜ、おろか者にならなければならないのでしょうか。そこには、私 達が陥 りやすい「正義」の怖さが隠れています。

今、世界では悲惨な 争 いが絶えません。ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル軍とガザ地区の戦闘、そして大国による軍事行動など、ニュースに映る指導者たちは、自 らの 行 いを 疑 わず、正しいことをしているのだと自信に満ちあふれてさえいるように見えます。

しかし、そこに正義の危うさを感じてしまうのです。「自分は100%正しい」と信じ切った時、人間は傲慢で冷酷になります。自分の「正義」

に反する者を一方的に「悪」と決めつけ、攻撃することに痛みを感じなくなってしまうからです。歴史を振り返れば、悲劇の多くは、こ

うした「暴走する正義」によって引き起こされてきました。指導者が 自 らの正当性を声高に主 張 し、敵を「絶対的な悪」と断じた瞬間、

その正義は「不正義」へと転落するのです。自分の正義だけが唯一の正解だと思い込む心 こそが、実は最 も真実から遠いところにあり

ます。もちろん、お互いが非を認めれば 争 いは解決しますが、現実の 争 いは、強 大な軍事 力 を持つ者が「正義」を振りかざし、抵抗

できない人々の 命 を一方的に踏みにじっています。この無惨な 状 況 を前に、「どちらも悪い(喧嘩両成敗)」など安易な理屈で片付け

てはいけません。家族や住まいを奪われ、尊厳を踏みにじられている人々を前に、そんな無責任なことを言うのは、あまりにも相手への

想像 力 が欠けているからです。

ひとたび指導者が「自分達の正義こそが唯一の真実だ」と思い込んでしまった時、その言葉は対話の手段ではなくなり、他者を排除す

る武器へと変わってしまいます。その思い上がりこそが、ウクライナやガザ、イランで 失 われる 命 を、まるで「必要な犠牲」であるかの

ように正当化してしまっているのです。平和への道は、自分の正義を押し通すことではなく、その大義の下に 行 われる攻撃を、まずは勇氣

を持ってやめることから始まるのではないのでしょうか。

法然上人が説かれた「愚者になりて」という生き方は、単に努力をやめて犯罪を犯したり、臆 病 になることではありません。自分の

弱さや不完全さを認め、自 らの正義を 疑 う「勇氣」を持つことです。自分の弱さを知る人は、相手の痛みに想像 力 を 働 かせることが

できます。それは「自分は正しい」と信じ込んでいる 間 は、決して見えてこない世界なのです。自 らの「愚か

さ」と「弱さ」を受け入れられた時、私 達は初めて、振り上げた 拳 を下ろし、他者に寄り添う一歩を踏み出す

ことができるのではないのでしょうか。「自分もまた、間違いを犯す一人の人間 (凡夫) にすぎない」という法然

上人や親鸞聖 人の謙虚な教えを、今、この世界を生き抜くための道 標 として大切に受け止めていきたいと

ねん がつしょう
念じています。合 掌

しゅうそしんらんしょうにんごうたんえ がつ にち
宗祖親鸞聖 人降誕会は5月18日 (月) におこないます。

しょうがくぶらいはいいいんかい
小学部礼拝委員会

